

mont-bell

アウトドアを通じて 生きる力を育む

■座談会

辰野 勇
安田 忠典
吉田 梨沙子
株式会社モンベル 代表取締役会長兼 C.E.O
人間健康学部 教授
人間健康学部 4 年次生(取材時/2023年3月卒業)

■座談会 ー1

■研究最前線 / Research Front Line
ワークスタイル・ワークプレイスの研究
ワーケーションがもたらす、地方創生とウェルビーイング ー7
社会学部 ー 松下 慶太 教授

• The Regional Revitalization and Well-Being brought about
by Workations
Faculty of Sociology ー Professor Keita Matsushita

夏の暑さを超える知恵を研究
都市環境を改善するため、建築の専門家の視点を生かす ー11
環境都市工学部 ー 宮崎 ひろ志 専任講師

• Utilizing the perspective of an architecture expert to improve
the urban environment
Faculty of Environmental and Urban Engineering
ー Lecturer Hiroshi Miyazaki

■リーダーズ・ナウ ー15

卒業生 ー 吹田市環境部環境保全指導課 藤原 明日香 さん
写真家 高田 晋浩 さん
在学生 ー 文化会探検部

■トピックス [学内情報] ー21

全学共通の「キャリア形成科目群」を新設
自律的なキャリア形成能力を低年次から育成する ほか

■社会貢献・連携事業 ー22

商学部・鈴野仁子ゼミによる産学連携企画第2弾
“ながら” 足裏ケアスリッパ「Uruvi」を開発 ほか

■関大ニュース ー23

第31回「関西大学体育振興大島謙吉スポーツ文化賞」
授与式を挙行 ほか



■座談会

アウトドアを通じて 生きる力を 育む

自然が教えてくれる
社会課題のソリューション

辰野 勇

・株式会社モンベル
代表取締役会長兼 C.E.O

安田 忠典

・人間健康学部 教授

吉田 梨沙子

・人間健康学部4年次生
(取材時/2023年3月卒業)



高い品質と機能性の製品をリーズナブルな価格で提供し、トップクラスの登山家・冒険家から、里山ハイカーやキャンパーはもちろん、タウンウエアとしての日常使いまで、世界で愛されるアウトドア用品メーカー・モンベル。今回はその創業者にして登山家・カヌーイストの辰野勇会長を、人間健康学部の安田忠典教授とゼミ生の吉田梨沙子さんが訪ね、辰野会長の人生観、社会活動にも積極的な企業理念に触れつつ、アウトドア体験の魅力や価値などについて話し合った。



2019年、マッターホルンに挑んだ辰野さん

◆身体で感じる経験を通じて、人は成長する

辰野 吉田さんは、国立青少年教育振興機構のボランティアをされてきたんですね。僕はそこの評価委員を10年間務めていました。今年、機構から表彰されたそうですが、どのような表彰でしょうか？

吉田 高校生の時から、奈良県にある国立曾爾青少年自然の家でボランティアを続けてきたのですが、学業と活動を両立してきたことを表彰していただきました。



国立青少年教育振興機構「法人ボランティア表彰」を受賞した吉田さん

辰野 人間健康学部とは、どんな学部ですか？

安田 「スポーツと健康」と「福祉と健康」の2つのコースがあり、その間をつなぐものとして実践を伴う体験型学習を取り入れています。体験型学習はこれまでの教育に一番欠けていたものだと考えているのですが、人間健康学部では積極的に展開しています。堺市内の南海電鉄・浅香山駅前にあるキャンパスでは、本格的なプロジェクトアドベンチャー施設を備えており、学生たちは、初年次教育で仲間と協力して壁を登ったり飛び降りたり、グループ活動を通じた体験型学習を行っています。

辰野 そういったプログラムはチームワークづくりなどにも役立ちますね。ところで安田先生はレスリングをされていたんですか？

安田 高校生の頃、厳しい環境に身を置きたいと思い、レスリングを始めました。レスリングを極めることはできませんでしたが、



堺キャンパスに設置されているアドベンチャー施設を用いた体験型学習

関西大学に入学し、そこで恩師となる伴義孝先生に出会うことができました。伴先生は、近代社会における身体性の問題に体育という立場から取り組んでおられ、「身体を通じた経験の大切さ」を説いておられました。そんな伴先生との仕事は、一般的な体育のイメージからはずいぶんかけ離れていて、さまざまな身体技法やボディワーク、アウトドア・スポーツなどをどんどん大学体育の教材に導入してしまうのです。今こそ学校教育にも浸透しつつありますが、長らく「遊び」として教育現場では軽視されてきたアウトドア・スポーツなどが、実は体験の宝庫だったわけです。人が成長するのに「遊び」はとても大切なのです。

辰野 養老孟司先生もおっしゃっていたことですが、小学生の頃は勉強をしないで遊んでいいんじゃないか、体を使うこと、体づくりが第一だと。子どもの時に、身体を動かした体験から感覚として学ぶことをもっとやらないといけない。だから大学生になってからでは遅いのではと思ってしまいます。

安田 それはおっしゃる通りで、子どもの時から経験していることが望ましいですが、今の子どもたちには3つの間がない、時間、空間つまり遊び場ですね、それと仲間がないという状況にあります。ですので、大学に入って自由な時間ができてからでも、そのような経験を積むことは意味があると考えています。私はこれを「原体験の焼き直し」と呼んで、学生たちと本気で遊んでいます。

◆野遊びから自由を学ぶ

吉田 私は奈良県出身で、子どもの時から国立曾爾青少年自然の家で野外活動をするような環境にいたので、野生的に育ってきました。自然の中での体験が人間には大切だと思って、大学は人間健康学部を選びました。

辰野 吉田さんが野遊びを始めたのは、お父さんやお母さんの影響ですか？

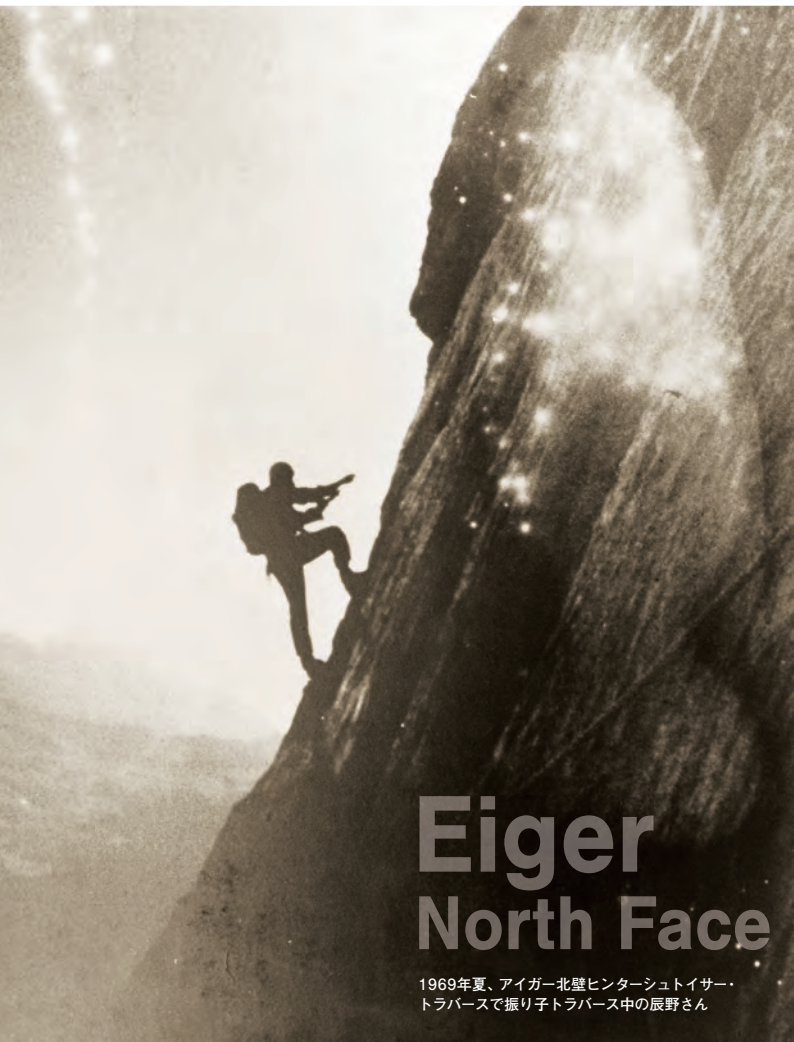
吉田 母親が保育士なので、自然の中での体験が大事だという考えがあったのか、物心つく前からいろいろなことに参加させてくれました。

辰野 面白かったですか？それともつまらなかったですか？

吉田 奈良から伊勢まで自転車で行く冒険とか、100キロ歩いたこととか、つまらなかったこともたくさんありました。でも、つまらないうちに楽しかったですね。

辰野 親が良かれと思って連れて行っても、子どもにとっては自分の意思ではないから、寒くてしんどいだけで、トラウマになってしまうこともあるかもしれませんが、楽しく感じたのなら、吉田さんには向いていたのですね。

■座談会



Eiger North Face

1969年夏、アイガー北壁ヒンターシュトイサー・トラバースで振り子トラバース中の辰野さん



Matterhorn



▲2019年、50年ぶりにマッターホルン登頂を果たしガイドのベネディクト・ベレンさんと握手を交わす



▲カヤックを操る辰野さん。国内以外にも世界中の河川を下ってきた経験を持つ



「モンベル・アウトドア・チャレンジ」で開催されたカヤックスクール(2020年)

吉田 最初は連れられて行っていました。翌年は自分の意志で行って来て、それからはどんどん自分から参加していました。

安田 野遊びの隠れた効果の一つに「自己決定」があります。日本の学校では、言われたとおりにすることが良いことだとされてきました。支配と服従という縦の関係の下では、自己決定が許されず、指示待ち人間になってしまうわけです。学校の野外活動だって集団教育という感じでした。しかし、遊びだけは、自分で決めてもいいんです。この自己決定の先にのみ自己変容、つまり自らが望んだ自分になっていくという、本来の意味での成長がある。それを自由というのだと思います。ロシアのウクライナ侵攻が始まって以来、学生たちにはこの自己決定と自由のことばかり話しています。

◆スポーツと福祉で「健幸」な社会を実現

辰野 人間健康学部での教育のキーワードは何でしょうか？

安田 スポーツも社会福祉も実は人間の幸せのための文化的活動です。どちらも近代社会に生まれましたが、当初スポーツは健康な人のみを対象にしていました。一方、社会福祉は、さまざまな事情でスポーツが思うようにできないような状況に追い込まれた人たちのために発展してきましたが、これからは双方がクロスし

てこそすべての人の居場所ができる、誰一人とり残されない社会ができると考えています。

例えば、ゼミの学生たちが、堺キャンパスの近くにある特別養護老人ホームと協力して入居者の夢を叶えようというプロジェクトを立ち上げました。学生の「何かやってみたいことはありますか」の問いに対して、複数の入居者さんから「もう一度山へ登ってみたい」との答え。今の入居者さんたちの世代は、若い頃に登山ブームがあったのです。このやりとりがきっかけとなって、学生と施設の職員さんでサポートしながら入居者さんたちと六甲山へ登りました。このように、人間健康学部では、スポーツと社会福祉が交わることで何ができるのか、皆が「健幸」に暮らせる、より良い生き方とは何かを追求しています。

◆山が僕の居場所。自分の価値観で歩もう

辰野 僕は子どもの頃は体が弱く、僕が育った堺では、小学校高学年になると、雪が積もった金剛山に行くのが恒例だったのですが、僕は見送り。校医が「君は体が弱いから、連れて行けない」と。その頃ちょうど、日本人がマナスル初登頂に成功するんです。この世界的な快挙は、敗戦後の日本に元気を与えてくれました。

誰かと比べる人生ではなく、しっかりと自分の足元を見て、誰かに押し付けられた価値観ではない、自分の価値観で歩むことが大切だと僕は思っています。



趣味の横笛を奏でる



辰野さんの著書▶

そして登山ブームが起り、僕もいつか山男になりたいと憧れて、中学に入った頃から近所の友達と一緒に金剛山に出掛けるようになりました。高校1年生の時に国語の教科書で、登山家ハインリヒ・ハラーが書いた『白い蜘蛛』というアイガー北壁初登頂記を読み、それで僕の人生が決まりました。「アイガーに登ろう」、そして「山に関する仕事をしよう」と。

大学からでは遅いのではと先ほどは言いましたが、何歳から始めても構わないとも思います。「Never too late」、遅すぎることはない。結局、どこでそのきっかけに出会うか。僕の場合はたまたま一番感受性の高い時に山に出会って、この道を選ぶことになったわけです。

誰かと比べる人生ではなく、しっかりと自分の足元を見て、誰かに押し付けられた価値観ではない、自分の価値観で歩むことが大切だと僕は思っています。出会いや気づきはどんな場面でもありうる。75年間生きてきて最近つくづく思うのは、人生とは居場所探しの旅だと。僕は勉強が得意ではなかったから、学校に行っても居場所がなかった。だけど山へ行ったら、そこが僕の居場所だった。人間はそんなに強くないから、自分が逃げ込める場所を見つけた方がいいですね。



辰野 勇 — 一つのいさむ
 ■株式会社モンベル代表取締役会長兼C.E.O。アルピニスト、カヌーイスト。1947年大阪府堺市生まれ。1969年アイガー北壁を世界最年少、日本人第2位を果す。帰国後、日本初のクライミングスクールを開校。1975年モンベルを創業。阪神・淡路大震災、東日本大震災ではアウトドア義援隊を組織し支援活動を行う。京都大学特任教授、びわこ成蹊スポーツ大学客員教授、天理大学客員教授。1994年関西ニュービジネス協議会・起業家大賞、1999年イタリア山岳会・2000年記念賞、2016年毎日経済人賞受賞。2021年紺綬褒章受章。日本レクリエーションカヌー協会会長、日本・スイス国交樹立親善大使、シートゥーサミット連絡協議会代表など公職多数。山岳雑誌「岳人」編集長。著書に『軌跡』(ネイチュアエントラープライズ)など

座談会



安田 居場所も価値観も私たちが大事にしているキーワードです。
吉田 安田ゼミは「C(コンフォート)ゾーン」という心の安定を得られる場所、居場所づくりを大切に考え、地域の小学生や障がい者、高齢者の方と居場所を作ろうと活動してきました。まさに会長がおっしゃったことと同じ学びを得てきたように思います。



▲堺市と関西大学との地域連携事業「熊野本宮子どもエコツアー」



吉田 梨沙子—よしだりさこ
 ■2000年奈良県葛城市生まれ。奈良県立高田高等学校卒業。2023年関西大学人間健康学部卒業。同年4月からアウトドア施設の運営やアクティビティ関連事業などを展開する株式会社EXコミュニケーションズに就職。高校時代から国立曽根青少年自然の家でボランティア活動を行い、2023年国立青少年教育振興機構法人ボランティア表彰を受賞。

安田ゼミは心の安定を得られる場所、居場所づくりを大切に考え、地域の小学生や障がい者、高齢者の方と居場所を作ろうと活動してきました。

◆モンベル7つのミッション。広がる連携活動

辰野 モンベルにはモンベルだから果たせる社会的使命があると考え、7つのミッションを作りました。「1.自然環境保全意識の向上」、「2.野外活動を通じて子どもたちの生きる力を育む」、「3.健康寿命の増進」、「4.自然災害への対応力」、「5.エコツーリズムを通じた地域経済活性化」、「6.一次産業(農林水産業)への支援」、「7.高齢者・障害者のバリアフリー実現」の7つです。

アウトドアは、このミッションを包括的に担っていくことができる。大げさに言えば、少子化をはじめ、我が国のさまざまな社会問題に対するソリューションのキーワードではないかと僕は考えているんですよ。

安田 7つのミッションは共感することばかりです。これを知って、私と学生たちが手探りでやってきたことが間違っていなかったと確かめられた思いがします。

辰野 7つのミッションは一つ一つ独立したのではなく、すべてが有機的につながっています。例えば行政では縦割りになってしまうことを、横軸で連携することができる。これを提唱したところ、いろいろな自治体が包括連携協定を結んで一緒にやりたいと手を上げてくれました。都道府県や市町村、大学、企業など123団体*と締結しています。*126団体(2023年6月1日現在)

安田 すごい数ですね。
辰野 この7つのミッションは魔法の言葉なんですよ。これを基軸に約120の産学官がつながっていますから、例えば防災連携協定を結ぼうとなれば、一気に実現することもできます。

実は今、関西大学さんとも包括協定を結ぼうという話が進みつつあります。いくつものキャンパス、多彩な学部で学ぶ学生との触れ合いを想像するだけでも、無限の可能性を予感できます。

◆基礎はプロに学び、リスクは自分で管理

辰野 福田康夫元首相が日本カヌー連盟会長の時に、同連盟の下に日本レクリエーションカヌー協会を設立しました。この協会では、



安田ゼミが企画している「大和川水辺の楽校」

自然体験学習などを安全に指導できる指導員を育成し、公認指導員として認定を行っています。カヌーだけでなくアウトドア全般に言えることですが、危険が伴うので、リスクマネジメントを自分でできないといけない。だから、やはり基礎技術はきちんと学ぶべきです。そのためには、初心者へ技術の伝達や安全に対する意識を教えることができる指導員を育成する必要があります。

僕らが登山を始めた頃は、登山の基礎技術は山岳会で先輩が無償で教えてくれました。でも本当は、テントの張り方やご飯の炊き方、ストーブの作り方、山の歩き方など必要なスキルは費用を払って教えてもらい、教える側もプロとして生計が立てられるようになるべきです。そしてある一定の知識や技術が身に付いたら山に入りますが、山へ入ったら誰もが対等ですから、自分の身は自分で守らないといけない。教育現場だから学校が責任を取るべきというような世界ではありません。ヨーロッパでは随分昔からそういった登山スクールがありますが、日本もようやくそういう動きになってきました。

安田 人間健康学部の卒業生にも、アウトドアのフィールドでガイドやインストラクターをしている人が何人もいます。モンベルに就職した卒業生もいます。水が合っているみたいで楽しそうにしていますね。山にも毎週行っているようです。

辰野 人生のルールは1本ではないので、それぞれ自分に合った道を見つけられるといいですね。僕は入社式で多くの新入社員を前に、いつも話すことがあります。「あなた方はモンベルに憧れて入ってきたかもしれませんが、思っていたものとは違うと感じたら一刻も早くやめてください」と。違う方向を向いて仕事するのは、お互い不幸ですから。

大事なことは、大学を卒業した後どうするのか。小学校から大学までの教育課程は、居場所を探していく過程です。にもかかわらず、なんとなくこのルールに乗って勉強していたら、将来うまくいくのではないかという思い込みが世間にはあるような気がします。

吉田 ところで、モンベルのマスコットはなぜクマなのですか？
辰野 「モンタベア」ですね。クマは自然環境、森の象徴だと、もっともらしい理由付けをしていますが、実は単純にかわいいから。徳島県の本頭村にクマ祭りというものがある、四国山地には現在20頭ぐらいのツキノワグマが生息していますが、絶滅の恐れがあるので何とか保全したいと、モンベルもお手伝いをしています。このような活動もしていますが、クマはかわいい、これに尽きます。

吉田 かわいいが理由だと知って、モンベルのことをもっと好きになりました。



■株式会社モンベル
 大阪市西区に本社を置くアウトドア用品の総合メーカー。1975年辰野勇・現会長が創業。直営店モンベルストアは国内123店舗、海外4店舗。アメリカ、スイスにも現地法人を展開、グループ7社でアウトドア用品の製造、卸、販売イベント運営企画、保険業などを総合的に手掛ける。自然保護活動、社会福祉活動、野外体験・環境学習、災害支援活動など社会活動も積極的に展開。全国の自治体、企業、教育・学術団体、公的機関など126団体と包括連携協定を締結(2023年6月1日現在)。



安田 忠典—やすだ ただのり
 ■関西大学人間健康学部教授。1967年大阪府堺市生まれ。1991年関西大学経済学部卒業、体育会レスリング部所属。1995年大阪体育大学大学院体育学研究科博士課程前期課程修了。2004年関西大学文学部専任講師。2010年人間健康学部開設に伴い移籍。著書に「南方熊楠の森」(共著・方丈堂出版)、「アカデミアが挑むSDGs 関西大学の多様な取り組み」(分担執筆・関西大学出版部)など。ゼミ活動では2012年から堺市の小学生・関西大学生・田辺市民が交流する体験学習「熊野本宮子供エコツアー」を実施。2016年度堺市環境活動表彰を受賞。また、「大和川水辺の学校」の企画運営に参画した活動と併せ、内閣府の2016年度「子供と家族・若者応援団表彰」内閣府特命担当大臣表彰(子供・若者育成支援部門)を受賞。

人間健康学部では、スポーツと社会福祉が交わるところで何ができるのか、皆が「健幸」に暮らせる、より良い生き方とは何かを追求しています。

▼(写真左)堺市環境活動表彰(中央は竹内修身前市長)／(写真右)内閣府特命担当大臣表彰



株式会社モンベルと包括連携協定を締結



関西大学と株式会社モンベルは、相互の人的、知的資源や物的資源の交流を図り、アウトドア活動を通して社会に貢献するため、包括連携協定を5月30日に締結しました。

さまざまな側面から地域課題に取り組んでいる両者が、本協定を機に相互に保有する資源を生かし、人材育成、自然環境意識・防災意識の向上、地域活性化等の取り組みを強化していきます。

具体的には、緑豊かな関西大学の各キャンパスを生かした取り組みをはじめ、学生・生徒の力を生かした地域連携や自然体験を通じた生き抜く力の育成、本学が連携協定を締結している自治体などの小・中学生、高校生を対象とした取り組み等を進めていく予定です。

研究最前線

ワークスタイル・ワークプレースの研究 ・Workstyle and Workplace Research



ワーケーションがもたらす、 地方創生とウェルビーイング

自分に合ったワークスタイルで働く社会へ

The Regional Revitalization and Well-Being brought about by Workations

Aiming for a society where people work in a
workstyle that suits them

奄美大島での松下教授のワーケーション
Professor Matsushita taking workation on Amami Oshima Island

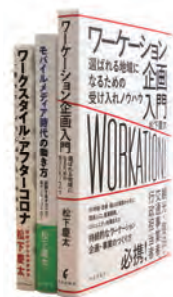


◎社会学部 松下 慶太 教授

• Faculty of Sociology — Professor *Keita Matsushita*

モバイルメディアの発達・普及やコロナ禍を経て、毎日同じオフィスへ出向く働き方の当たり前さは揺らいでいる。自ら多拠点生活を実践する社会学部の松下慶太教授は、メディア論の視点からワークスタイル・ワークプレースの変容を分析している。これからの働き方を考察し、企業・地方自治体との共同研究やアドバイザーなども務め、教育・研究にとどまらず、新しい魅力的な働き方や地域づくりのサポートも実践している。

The development and spread of mobile media and our experiences during the coronavirus pandemic have shaken up our perception of the conventional norm of traveling to work at the same office every day. Keita Matsushita is a professor in the Department of Sociology Media Major who practices a multi-base lifestyle himself and is analyzing the transformations in our workstyles and workplaces from the perspective of media theory. He considers future ways of working and cooperates with companies and local governments on joint research and as an advisor. In addition to work in education and research, he also provides support for new and attractive ways of working and regional development.



▲松下教授の著書
Books authored by Professor Matsushita

■コロナ禍と人口減で柔軟なワークスタイルが普及

— 専門分野を教えてください。

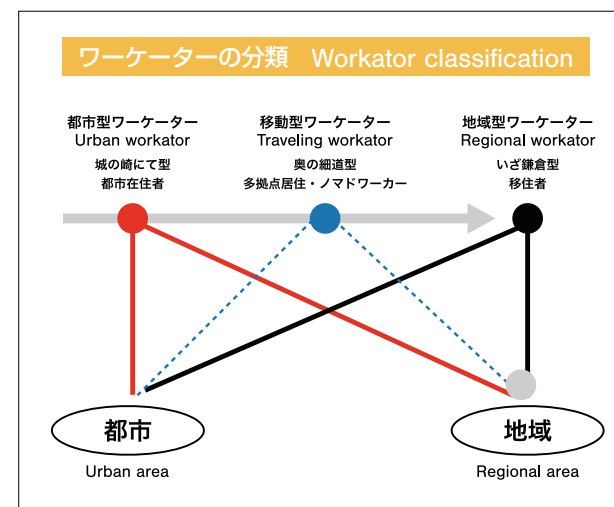
メディア論、ソーシャルデザイン、コミュニケーションデザインです。近年はリモートワークやワーケーション、デジタルノマドなどのワークスタイル、またコワーキングスペースやクリエイティブオフィスなどのワークプレースを対象に研究しています。

— 近年の働き方や働く場所の特徴はどんな点ですか。

私は地方での働き方に興味があります。例えば、普段は渋谷にあるオフィスで働き、夏の間は軽井沢で2週間働くなどのワーケーションや、逆に、軽井沢の自宅やコワーキングスペースからリモートワークをして、必要がある時に渋谷のオフィスに出向くというワークスタイルなど。このような働き方が少しずつ増えてきています。ヤフージャパンやメルカリなどのIT関連企業では、居住地・通勤手段の制限を撤廃したため、オフィスは都心にあるが、住居は地方に構えるという社員も多くなってきています。

— そのような背景として考えられるものは何でしょうか。

オンラインでできる仕事が増えたことがまず1つ目。2つ目は、コロナ禍でオフィスに出勤できない中、自宅などからのリモートでも意外に仕事できたという経験。3つ目は人口減による人手不足。育児や介護で毎日出社したり、定時勤務が困難な人や、のどかなところで子育てしたり、自身の趣味を楽しみたい人など、自分に合った働き方ができる職場を選ぶ人は増えつつあります。時間や場所に関して柔軟な勤務体制を用意できない会社には、人材獲得競争は厳しいものになってきています。



■ワークスタイルの再構築が人材確保・育成の鍵

— 働く人が求めるワークスタイルが多様になってきているので
すね。

フルリモート希望の人もいれば、毎日出社したいという人もいます。極端に言えば、オフィスに行きたい時は行く、行きたくない時は行かない。選べるのであれば、多分それが一番心地よい。

■ The pandemic and shrinking population have led to the spread of more flexible workstyles

— What areas do you specialize in?

My specialties are media theory, social design and communication design. In recent years, I have studied new workstyles, such as remote working, workations and digital nomads, and also new workplaces, such as co-working spaces and creative offices.

— What are the distinctive characteristics of recent ways of working and work locations?

One area that interests me is the way of working in regional areas. For example, this workstyle might be someone who usually works in an office in Shibuya, but works in Karuizawa for two weeks during the summer as a workation. Also, in the opposite pattern, it might be someone who normally works remotely from their home or a co-working space in Karuizawa, and just goes into an office in Shibuya when it is necessary. These ways of working have been gradually increasing.

Some IT-related companies such as Yahoo! Japan and Mercari have removed their restrictions on where employees live and how they commute to work. This has led to an increase in the number of employees who have an office in central Tokyo, but have their residence in a regional area.

— What do you think are the reasons behind this shift?

The first reason is that there are now more jobs that can be done online. The second came from the experiences people had when they couldn't go to their offices due to the pandemic. They discovered that they were actually able to perform their work quite successfully from a remote location such as their homes. The third is the shortage of labor that results from a shrinking population. More and more people are choosing a workplace where they can work in a way that suits them personally. For example, for people who are providing child-care or nursing care, going into a workplace every day and working regular office hours can be difficult. There are also some people who want to raise their children in a more tranquil location, and some people who want to be able to enjoy their own hobbies. Companies are finding it increasingly difficult to secure talented human resources if they are unable to offer working arrangements that are flexible in terms of time and location.

■ The restructuring of workstyles is the key to securing and developing human resources

— It seems that there is increasing diversity in the workstyles that working people seek.

Some people want fully remote work and others want to go into an office every day. In an extreme example, some people want to go to the office when they feel like it, but not go in when they do not want to go. If we are able to choose freely, then this is probably the most comfortable arrangement. This is not a dichotomy about whether online or offline is better. What I believe is important is how we design styles that combine these options.

We are going to see mismatches occurring between employers and employees if the employers do not disclose the workstyle in advance. For example, they might state that, "Our company operates fully remotely," that "This will be hybrid work," or that "We seek staff who want to come in five times a week." I think that from now on, achieving a sense of satisfaction with the workstyle will be the key to reducing turnover and increasing retention. For the people seeking employment, in addition to investigating the industry and the job type, it will also be important to consider the workstyle. The ideal workstyle for a person will change through the various stages of life. You might feel perfectly fine going into the office every day when you are young, but it could well become difficult when you reach an age where you

■研究最前線



▲デジタルノマドを積極的に受け入れている、ポルトガル・マデイラ島のボンタ・ド・ソルにあるコワーキングスペース

Coworking space in Ponta do Sol, Madeira Island, Portugal. The city actively accepts digital nomads.



オンラインとオフライン、どちらが良いかの二項対立ではなく、どう組み合わせるのか、その設計やデザインが重要だと思います。

今後は雇用する側が「当社はフルリモートです」や「ハイブリッドです」、「週5回出勤したい人に来てほしい」というように、ワークスタイルを開示しないと、ミスマッチが生じるようになるでしょう。ワークスタイルへの満足度が離職率を下げ、定着率を上げるポイントになってくると思います。求職者側は業界研究、職種研究に加えて、ワークスタイルを吟味しないとイケない。ワークスタイルはライフステージによっても変わります。若い頃は毎日オフィスに出勤できるかもしれませんが、育児や介護問題が出てくる年齢になるとそれが難しくなることもあるでしょう。雇用する側は、終身雇用でずっと同じワークスタイルを継続させるよりは、ライフステージによってワークスタイルを選べる柔軟性を提供することが重要になってくると思います。

大学から企業等に就職する節目においても、大学側は単なる就職活動支援にとどまらず、学生一人一人が大学卒業後の人生の中で、自分に合ったワークスタイルを見つけられるようなキャリア教育を実践していくことが必要だと思います。

——ワークेशनやリモートワークで効率や生産性は上がるのでしょうか。

よくその質問を受けるのですが、個人的には下がらなければ良いと思っています。リモートワークで生産性を上げなければいけないのは一種の「呪い」になります。生産性が上がるかどうかは、人や仕事の種類によってケースバイケース。それより、下がらな

いようにして、ウェルビーイングを高める道を模索するほうがそれこそ生産的な議論になるでしょう。

私はワークेशनやデジタルノマドを研究しているからといって、日本人全員にワークेशनしましょう、デジタルノマドになろうと呼びかけているわけではありません。大多数ではないにせよ、やってみようという人が増えているのだから、職場環境を整えて、できるようにしておこうということです。これは、社会や組織でマイノリティを認めることにも通じる。大きな意味では、ダイバーシティやインクルージョンの研究にも関わってくると思います。

■広がるワークेशन、受け入れる地方の反応は

——企業も働く人もそれぞれに合った働き方を探す今、地方はどんな反応をしていますか。

近年、国内外でデジタルノマド誘致が叫ばれるようになりました。海外のデジタルノマドは受け入れ先の住民との交流はあまり考えていません。一方で日本の場合は、積極的に交流してほしいという要望が受け入れ側にあるのが大きな違いですね。その先には、地方が抱える社会課題解決のためにゆくゆくは移住してもらいたい、企業に移転してもらいたいという本音もあるでしょう。ただ、ワーカーはそういう思惑を感じると敬遠してしまう人もいますので、受け入れ側はその距離感を探っていますね。

海外の話になりますが、ワークेशनの鉄板コンテンツの一つにサーフィンがあります。サーフィンは良い波が来るまで待つことが当たり前だから、必ず滞在が長くなる。限られた短期間の観光には向かないかもしれませんが、長期間滞在するワークेशनなら今日は雨だから諦めて仕事しようとなる。

実際にさまざまな土地に赴いてみると、その土地その土地でワークेशन資源が眠っていることに気づきました。名所や名産、名物料理などを観光資源と思っている方が多いですが、とらえ方を変えてみると、その地域の何気ない場所やものが、やってきた人には魅力になったりします。

長期滞在をすると、自炊のために地元の商店で買い物したり、クリーニングを利用したりと、いわゆる観光以外のいろいろなところでお金を使います。そういった意味でも、地方はワークेशनの特長や効果をうまく使ってほしいなと思います。

——ワークेशन含め、日本は働く人が働きたいように働ける社会になるのでしょうか。

ICTやAIの進化によって、人間に何ができるかが問われるようになってきました。創造性やイノベーションが求められる時に、自分にとって無理のあるワークスタイルで創造力を発揮できるかといえば、なかなか難しい。イノベーションにつなげる発想の転換、新しい刺激を得るために、ワークेशनのように異質なものに会うことを認める、促進する環境を整えている企業が、それに向く人材を採用できるでしょう。どういう人材を探りたいのか、AI、オートメーション化、DXが進んでいく中で、人は何をやるか、今の働き方でクリエイティブ性の高い人を育成できるのか問われてくる。いずれにせよ、良い人材は働きたいように働ける環境を作る企業に集まります。

オフラインで顔を合わせる授業では、協働するためのイメージ共有や協調性を高めるため、リアルで会うからこそできるレゴワークを行っている

In the face-to-face class, Prof. Matsushita incorporates Lego work into his teaching to help students imagine working together and improve cooperation.



face issues of childcare and nursing care. For the employers, rather than the conventional approach of employing people for life and having them continue the same workstyle up to retirement, I think that it will become increasingly important to offer the flexibility for employees to choose their workstyles to fit their life stages.

This is also something that universities need to consider when supporting students in their transition from study to employment. I believe they need to go beyond simply providing support for job-seeking activities and to also implement career education that helps each student discover the workstyle that will suit them in their post-university life.

—— Can workations and remote working raise efficiency and productivity?

I get that question a lot. Personally, I think we should just be satisfied if these do not decline. The requirement for remote working to be associated with an increase in productivity is a bit of a curse. Whether or not the productivity will increase will depend on the person and on the type of work. Rather than discussing productivity increases, I think it is far more productive to just ensure that productivity does not decline and to instead look for ways to increase wellbeing.



▲マデイラ島のホテルのテラスから大西洋を望む
View of the Atlantic from the terrace of a hotel in Madeira

Although I am studying workations and digital nomads, this does not mean that I am calling for all Japanese people to take workations, or to become digital nomads. I am not talking about something for the majority of people. All I am saying is that there are more and more people who want to give it a try, so we should prepare a work environment to provide them with the option. This has something in common with the acceptance of the minorities in society and in organizations. In the broad sense, I think it is connected to the study of diversity and inclusion.

■ The spread of workations - the reaction in the destination areas

—— Both companies and workers are now searching for new ways of working that suit them. What has been the reaction to this from the regional areas?

In recent years, there have been increasing attempts to attract digital nomads, both in Japan and overseas. Overseas, there is not really much consideration given to the interaction between the digital nomads and the residents of the regions they visit. On the other hand, the big difference in the case of Japan is that the areas receiv-

ing the nomads have a desire for active interaction. They are thinking beyond the initial visits and have a genuine desire to have people move to live there, or to have companies relocate there, as this is seen as a way to solve the social problems the regional areas are experiencing. However, some people going on workations will shy away from an area if they sense such intentions, so the regions receiving them are currently trying to find the ideal sense of distance.

If we look overseas, one of the standard types of workation is for surfing. Surfing involves a lot of waiting around for the good waves to arrive, so stays tend to be longer. It might not be something that can help attract people for a limited, short-term tourist visit, but it works well for a long-term stay such as a workation. If it rains, the person can simply give up on surfing that day and get on with their work.

As I have visited various different places, I have noticed that each place had its own untapped resources for workations. When we think about resources for tourism, most people will think of famous places of interest, specialty products, and specialty cuisine. However, from a different perspective, locations and items that seem unremarkable to the people who live in a region can make it very attractive to somebody who has come from elsewhere.

When you stay somewhere for a long time, you might shop at local stores to be able to cook for yourself, or use the local dry cleaning services. You will spend money in a variety of places that are not part of regular tourism. This is another reason why I hope that the regions can make good use of the features and effects of workations.

—— Do you think that Japan will become a society where workers can work the way they want, including regarding workations?

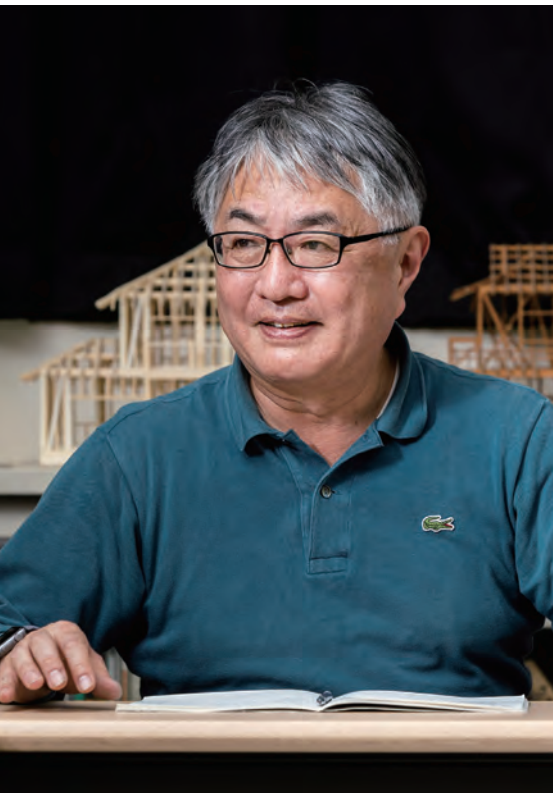
The advances in ICT and AI have led us to question what will be left for humans to do. If we are required to be creative and innovative, then it is not good to be forced into a workstyle that we find unreasonable and a burden. Such an environment is not conducive to creativity. Experiencing something out of the ordinary like a workation can provide the opportunity for new stimuli and new perspectives that will lead to innovation. A company that recognizes this and develops an environment that promotes it will be able to attract the personnel for whom it can be effective. The questions companies must address are what kind of people they want to hire, what will the people do when AI, automation, and DX have advanced, and whether they will be able to develop highly creative staff with the current way of working. Whatever the answers, the best human resources will be drawn to the companies that create an environment where workers can have a choice in the way they work.



▲例えば、仕事内容によってはいろんなスタイルでできることも……
Depending on the nature of the job, various work styles are available.

■研究最前線

夏の暑さを避ける知恵を研究 • Researching the Wisdom on Avoiding Summer Heat



都市環境を改善するため、 建築の専門家の視点を生かす

市街地の熱中症危険度マップを作成

Utilizing the perspective of an architecture expert to improve the urban environment

Mapping the level of heatstroke hazard in a city

●環境都市工学部 宮崎 ひろ志 専任講師

● Faculty of Environmental and Urban Engineering — Lecturer *Hiroshi Miyazaki*

地球温暖化などの影響で、日本の夏の平均気温は上昇を続けている。市街地を歩くだけで熱中症の危険にさらされ、「災害級の暑さ」という言葉が日常的に使われるようになった。1級建築士でもある環境都市工学部の宮崎ひろ志専任講師は熱中症の危険度マップを作成し、安全な場所作りに生かすよう求めている。

The average summer temperature in Japan continues to rise due to factors such as the effects of global warming. Just walking around a town can put people at risk of heatstroke, and the term “disaster-grade heat” is now in common use. Hiroshi Miyazaki is a lecturer in the Faculty of Environmental and Urban Engineering and also a qualified First-Class Architect. He has created a hazard map for heatstroke and is urging people to use it to build urban spaces that are safe.

■公務員として、大学の設計に携わる

—以前は、兵庫県庁に勤めていたそうですね。どのような業務に関わっていたのか教えてください。

設計に携われるというので、1978年に神戸大学工学部を卒業した後、建築職で兵庫県庁に入庁しました。最初は建築基準法や都市計画法などに基づく許認可事務を担当し、その後は7年間にわたり設計の業務を行いました。

携わった設計は大学関連施設が多く、神戸商科大学(現・兵庫県立大学)を新キャンパスに移転する際の設計や、姫路工業大学(同)理学部キャンパスを兵庫県上郡町に建設する仕事などに関わりました。

県庁を退職した後は、兵庫県立自然系博物館(現・兵庫県立人と自然の博物館)の設立準備室や姫路工業大学自然・環境科学研究所に勤務し、その頃から都市環境をテーマに研究しました。桜の開花は都市部が早いということを県内の小学校と連携して調べたこともあります。関西大学には2007年に着任しました。

■都市環境計画が専門

—現在、どのような研究や教育をされていますか。

専門は都市環境計画です。もともと都市計画は、19世紀末から20世紀初頭にかけて、ロンドンやニューヨークなどの大都市が公害などにより生活環境が悪化したことを背景に誕生したものです。当初は環境を改善することが都市計画の目的だったのですが、都市が高度化する中、建物や道路などの都市構造物の適正配置など

に関心が向いています。

私自身は、今の時代の都市計画は、当初の目的に立ち返るべきだと思っています。現在、日本は低炭素社会実現のため、「2030年度に、温室効果ガスを2013年度から46%削減する」「2050年までに温室効果ガスの排出を全体としてゼロにする」ことを目指すと世界に宣言しています。ということは、2020年代に大学を卒業した学生が30歳、そして50歳くらいになる頃には達成できていなければなりません。働き盛りの一番大切な時期を使って社会を変えていく必要があります。そういう視点で住宅の建築やまちづくりを研究し、学生を指導しています。

心強いことに、私のゼミの卒業生には、大手企業で駅前開発などのまちづくりに携わっている人が多くいますので、今後、環境の時代のまちづくりを実践してくれたらいいなと思っています。

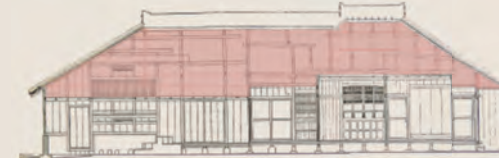
■暑い沖縄で「中村家住宅」が快適な理由

—研究内容を具体的に紹介してください。

2008年から2019年まで、沖縄にある国指定重要文化財「中村家住宅」の屋根瓦を研究しました。18世紀中頃に建てられたと伝えられている住宅です。大阪や九州の屋根瓦は日差しを浴びるととても熱くなるのですが、中村家住宅の場合はひんやりして冷たいのが特徴です。

理由は素材にありました。中村家住宅の屋根瓦は現代の瓦と違って素焼きです。そのため雨水を吸い込み、日が当たると水分が蒸発する際に、気化熱により熱が奪われるという仕組みでした。

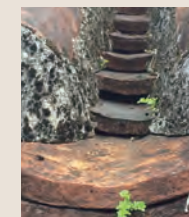
●沖縄「中村家住宅」の屋根瓦に学ぶ暑熱対策 Study of Cooling Methods from Roof Tiles of Nakamura House, Okinawa



▲大きな屋根で確保した大きな小屋裏空間 Attic spaces secured by a large roof

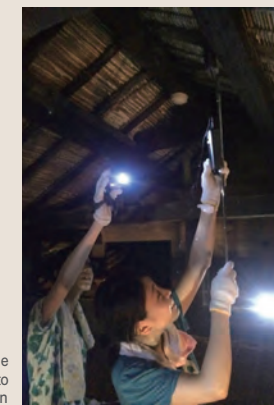


▲屋根瓦の調査を行う研究室の学生
Research laboratory students investigating roof tiles



▲瓦には換気のための隙間がある
Gaps between tiles allow for ventilation

土と竹で組まれた小屋裏空間。雨水は通さず、通気を保つ
Attic area created by the soil and the bamboo, which does not allow water to pass through but keeps the ventilation



▲共に調査を行った学生たちと With the students who investigated together

roads and other urban structures.

My personal opinion is that city planning should now return to its original purpose. Japan has declared to the world that it will work towards the realization of a low-carbon society by aiming to reduce its greenhouse gas emissions by 46% from fiscal 2013 levels by fiscal 2030, and to net zero by 2050. This means that for students graduating from university in the 2020s, these targets will need to have been met when those graduates are around 30 years old and around 50 years old. It will be necessary for them to use the most important period of their working lives to change society. That is the perspective I take when I study residential architecture and community planning, and when I instruct the students.

Encouragingly, many of the graduates of my seminar are now working at major companies and are involved in city development such as the redevelopment of areas in front of railway stations. My hope is that they will practice city development that is appropriate for this era of the environment.

■ Why the “Nakamura House” is comfortable despite the heat in Okinawa

— Please introduce some of your specific research.

From 2008 to 2019, I studied the roof tiles of the “Nakamura House,” which is a nationally designated Important Cultural Property in Okinawa. It is said that the house was built in the middle of the 18th century. Roof tiles in Osaka and Kyushu become very hot when the sun shines on them. However, in the case of the Nakamura House, they remain cool.

The reason for this is the material they are made from. Unlike modern tiles, the roof tiles on the Nakamura House are unglazed. This means that they absorb rainwater. The mechanism of the cooling is that the moisture then evaporates when the sun shines on the tiles, and heat is taken away by the latent heat of vaporization.

■ Involvement in university design as a public servant

— I understand you used to work for the Hyogo Prefectural Government. What kind of work did you do?

I heard that I could be involved in design, so after graduating from the Faculty of Engineering at Kobe University in 1978, I joined the Hyogo Prefectural Government as an architect. At first, I was in charge of licensing work based on the Building Standards Act and the City Planning Act. After that, I did design work for seven years.

A lot of the design I was involved in was for university-related facilities, such as the design work when Kobe University of Commerce (which is now the University of Hyogo) relocated to a new campus. I was also involved in the work to construct the Faculty of Science campus of the Himeji Institute of Technology (which is also now the University of Hyogo), in Kamigori Town in Hyogo Prefecture.

After I left the prefectural government, I worked in the office preparing for the establishment of a Hyogo Prefectural museum of natural history (which is currently the Museum of Nature and Human Activities, Hyogo). I also worked at Institute of Natural and Environmental Sciences of the Himeji Institute of Technology, which is where I began research on the theme of urban environments. I once conducted an investigation with elementary schools in the prefecture regarding how cherry blossoms bloom earlier in urban areas. I joined Kansai University in 2007.

■ Specialization in urban environmental planning

— What kind of research and education are you doing now?

I specialize in urban environmental planning. City planning was originally conceived from around the end of the 19th century to early in the 20th century, when problems such as pollution were causing deteriorating living conditions in large cities such as London and New York. The original purpose of city planning was to improve the environment. However, as cities become more sophisticated, attention began to turn to matters such as the best arrangement of the buildings,

■研究最前線

さらに屋根を調べると、竹を敷いた上に土を載せ、その上に屋根瓦を並べる構造で、全体的に隙間だらけだと分かりました。実際に、実験で無害な煙を屋根裏に発生させ、煙が外に抜けて出ていく様子を確認しました。中村家住宅の屋根は、雨水は通さないけれど室内を蒸し暑くする水蒸気は逃がし、室内を快適にしています。

—昔の人の知恵はすごかったんですね。

そう思います。現代の建築は、素焼きのような多孔質の建材を嫌います。水を吸うとこげが生えたり、凍ると割れてしまうためです。しかし、昔の人はこれほどまでに素材を生かしていたのだと知り、驚きました。

戦後、JIS(日本工業規格)ができてから、瓦は水を吸わず、重ねたときに隙間ができないことを目指すようになりました。私たちは新しく良いものを作っていたつもりだったのですが、暑熱をしのぐ先人の知恵を失い、エネルギーを使う空調に頼るようになっていったのだと思います。

■熱中症を防ぐまちづくりのために

—熱中症対策も研究していると伺いました。

日本では近年、毎年のように1,000人以上が熱中症で亡くなっています。今後さらに温暖化が進むと、被害は深刻になるでしょう。私は建築分野から、熱中症を防ぐまちづくりをすることで温暖化対策に貢献できると考えています。

市街地の温度を下げるためには、日よけを作る、木を植える、ミストを散布する、道路の舗装を変える、などさまざまな対策が考えられます。ただ、全ての場所ですべての対策を取ることは現実的ではありません。一番危険な場所から着手するべきなのですが、その場合に「どこから手をつけていいかわからない」という問題が生じます。そこで私たちは、地方自治体に活用してもらいたいことを想定し、市街地の各地点の暑さと人の流れをシミュレーションしながら、熱中症の危険度が一目で分かる地図を作成することにしました。

対象地域は、兵庫県神戸市のJR三宮駅南側の中心市街地を選びました。兵庫県にはLiDAR(ライダー)というセンサーを航空機に積んで得られた樹木1本1本の高さも分かるデータがあり、このデータを活用すればより正確なシミュレーションが可能になると考えました。

—樹木の高さのデータはなぜ必要なのですか。

熱中症の危険度は気温だけでは計れません。例えば、湿度が高いと汗が蒸発せず、暑く感じます。また、照り返しも大きな要素です。



●神戸・三宮を対象にした熱中症危険度マップの抽出



人流マップ
People flow map
携帯電話の位置情報から得られた人流データ。赤い点は人を表し、赤い箇所は混雑していることを示す
Shows the flow of people based on the location information obtained from mobile phones. Red dots indicate people, and red areas indicate congestion.

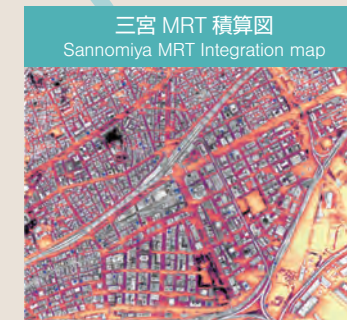
Heat stroke risk maps for Sannomiya, Kobe



三宮 SVF ビルの谷間図
Sannomiya SVF Building Valley map
SVF (Sky View Factor) によるビルの谷間と日射がよく当たる場所を抽出した図
Map showing building valleys and sunlit areas based on the SVF (Sky View Factor).



暑熱危険度マップ
Heat Hazard map
複数のデータを用いて危険区域を抽出。赤い点のある場所は暑い時間が長く続き人も多く集まる、優先的に熱中症対策が急がれる地点
Extracts hazardous locations from multiple datasets. A location with a red dot means that it is a place with long hot hours and a high concentration of people.



三宮 MRT 積算図
Sannomiya MRT Integration map
周囲の全方向から受ける熱放射を平均化した温度表示＝平均放射温度(MRT)の積算による、暑熱危険エリアの抽出を行った図
Figure showing the extraction of heat hazard areas by integration of heat radiant areas by averaging thermal radiation received from all directions in the surrounding area.

地面や壁面が太陽光で熱せられると、表面から赤外線が出て体に当たり、暑さを感じるのです。市街地の暑さをシミュレーションするには、この照り返しの強さも計算に入れなくてはならず、建物のデータに加えて緑陰を作ってくれる樹木のデータも必要です。

照り返しの強さは、人工の建物と植物で全く異なります。植物は光合成をする時に水を蒸散するため、暑さを緩和してくれます。建物の影と比べて木陰が涼しいのはこのこともあるからです。

気温や湿度、風速、日射、建物からの赤外線量などのデータを使って暑さをシミュレーションしました。さらに携帯電話の位置情報から得られた人流データも加味して地図に表し、暑い時間が長く続き、多くの人が集まる熱中症対策を急いだ方がよい場所が分かるようになりました。

■景観より安全第一の時代に

—熱中症の危険度マップの重要性はどこにあるのでしょうか。
専門用語を使うと、「熱中症対策は輻射環境を良くすればいい」というメッセージになっています。輻射は照り返しのことです。これからは、例えば樹木1本を選ぶ場合でも、景観だけでなく安全を第一に考えて決める時代になると期待しています。私たちの研究が安全なまちづくりに役立てばうれしいですね。

Further inspection of the roof revealed that it has a structure that is full of gaps. Bamboo had been laid first, soil was placed on top of the bamboo, and then the roof tiles were arranged on top of the soil. In an experiment, I actually generated a harmless smoke in the attic area and confirmed how it moved to the outside. The roof of the Nakamura House does not allow rainwater to pass through it, but it does allow water vapor to escape. This prevents the interior becoming hot and humid, so this makes the interior comfortable.

— The wisdom of the people of the past was amazing.

I agree. In modern architecture, porous building materials like unglazed pottery are disliked. This is because if water is absorbed, then moss may grow on the material, and also the material may split when it freezes. However, I learned that people in the past made such great use of these materials. This was a surprise.

In the postwar period, after the establishment of the Japanese Industrial Standards (JIS), the goals for roof tiles became to prevent them from absorbing water and to ensure that no gaps are created when they are arranged. We thought we were building something new and better, but I think we had squandered the wisdom of our predecessors on how to handle the heat and we just began to rely on air conditioning that required energy use.

■ City planning to prevent heatstroke

— I heard that you are also researching measures against heatstroke.
Recently in Japan, it seems that almost every year more than 1,000 people die of heatstroke. As global warming progresses, this



will no doubt get even worse. As someone in the field of architecture, I believe that I can contribute to the measures to deal with global warming through city planning that prevents heatstroke.

There are many different ways to reduce the temperature in a city area. For example, this includes by creating shade, planting trees, spraying mist, and changing the materials of the pavements. However, it is not realistic to try to implement such measures everywhere. We need to start from the places that are the most dangerous. However, this leads to the question of where we should start. This is why we decided to create a map that shows the level of risk of heatstroke at a glance, with the assumption that it could be put to use by local governments. The map creation is performed by simulating the heat and the flow of people at each point in a city area.

As the target area, we selected the central urban area to the south of the JR Sannomiya Station in Kobe City, Hyogo Prefecture. Hyogo Prefecture has data indicating the heights of each individual tree, which were obtained by mounting a sensor called a LiDAR on an aircraft. We thought that using that data would enable us to perform more accurate simulations.

— Why do you need to know the data on tree heights?

The risk of heatstroke is not just determined by the air temperature. For example, it feels hotter if there is high humidity, because sweat does not evaporate. The reflected heat is also a big factor. When the ground or a wall is heated by sunlight, infrared rays are emitted from its surface. We feel the heat when those rays hit our body. In order to simulate the heat in an urban area, it is necessary to also include the intensity of this reflected heat in the calculations. Therefore, in addition to the data on the buildings, it is also necessary to have the data on the trees, which produce shade.

The intensity of the reflected heat is completely different between man-made buildings and plants. Plants evaporate water when they photosynthesize, which helps reduce heat. This is one reason why it is cooler in the shade from trees than in the shadow of a building.

We simulated the heat using data such as temperature, humidity, wind speed, solar radiation, and the amount of infrared radiation from buildings. We also added data on the flow of people, which we obtained from mobile phone location data. We expressed all of this in a map and made it possible to see the points where measures against heatstroke should be a priority. This was the places where it was hot for a long time and also there were a lot of people.

■ An age where safety is more important than the landscape

— What do you think makes the heatstroke map important?

To use technical terminology, it is because it communicates the message that if we want to take measures against heatstroke, we need to improve the radiation environment. This radiation is the reflected heat. My hope is that from now on, even if we are only talking about selecting a single tree, any landscape choices will be made with consideration of safety as a priority over the appearance. It would be great if our research could play a role in safe city planning.

LEADERS NOW!



地域の水環境を守る!

QOLの基本となる水に向き合う

●吹田市環境部環境保全指導課

藤原 明日香 さん

—環境都市工学部エネルギー・環境工学科
(現エネルギー環境・化学工学科) 2018年卒業—

「学んできたことを生かせる仕事がしたい」。就職活動時に藤原さんが最もこだわったポイントだ。そこで、関心を持って学んできた環境保全に関わる就職先を探すなかで出会ったのが吹田市職員。学習・研究内容を要件とする採用枠(環境コース)で入庁した。そして今、大学生活を過ごした吹田で、水と向き合う毎日を送っている。



藤原 明日香 —ふじわら あすか
■1995年大阪府生まれ。大阪府立岸和田高等学校卒業、2018年関西大学環境都市工学部エネルギー・環境工学科卒業。同年吹田市職員(環境コース)として入庁。2023年4月現在、環境保全指導課に勤務。趣味はストレッチ、読書、旅行、ダンス。

●年に数回は母校をチェック

「卒業後も実は年に数回は関西大学を訪れています」。藤原さんが現在所属しているのは、吹田市環境部環境保全指導課。企業や大学などからの排水に関する規制や届出指導を担当している。「有害な物質を取り扱う事業所に立入検査をして、排水が地下に浸透することがないか、規制基準値は守られているかなどを調べます」。吹田市内の教育研究機関でもある関西大学もその立入検査対象になっており、担当者である藤原さんは母校をチェックしているというわけだ。

立入検査対象となる事業所は市内で100近くにのぼるが、「主に有害物質を使用していたり、排水量が多いといった環境への影



響が大きい事業所の立入検査を行います。環境汚染は一度起こってしまうと元の状態に戻すことが大変であり、未然に防ぐことが重要という思いで仕事にあたっています。

立入検査は、1事業所につき30分~1時間。決められた手順に沿って採水し、持ち帰って分析を依頼し、結果を評価している。必要に応じて行政指導を行い、改善を促している。「吹田市内の事業所は、そもそも有害物質を流さないように、産業廃棄物として処理するなど、環境保全に対する高い意識をもって排水処理に取り組んでおられます」と、藤原さんは目を細める。

●水環境はQOLを左右する

立入検査は抜き打ちだからこそ、ハプニングも少なくない。例えば、採水予定地にたまたま水が流れていなかったり、工場自体が稼働していなかったりすることもある。そうなると別の日に出直す、もしくは、水が流れている箇所を探し回らなければならない。「大変なのはマンホールを持ち上げることぐらい」と言うが、「川で魚が死んでいる」「川がいつもより汚れている」のように、環境汚染が疑われる通報にも迅速に駆け付けて対応する藤原さんたちの仕事は、極めて重要だ。

以前は、下水道部水再生室に所属していた藤原さん。「下水処理場での勤務で、処理場の水質管理や下水道へ排水する事業所の

規制業務に従事していました」。まじめで快活な仕事ぶりが評価されて、ケーブルテレビの取材で処理場の案内役を務めたこともある。「水環境を守る業務にやりがいを感じる」と藤原さんは語る。「今は住む人にとって地域の川や水路の水がきれいなのが、当たり前と考えられる時代。なので、川や水路の水が汚れると、まちの環境が悪くなり、QOLは格段に下がります」。人が生き、暮らしていくために必要な水。その供給源が悪化すればどうなるかは自明のこと。「当たり前にある安全な水環境を当たり前を守ることが、私たちの仕事なんです」。

●助け合いながら、楽しみながら学んだ4年間

「休日に街を歩いても、ついついマンホールを見てしまう」と笑う藤原さんが、環境問題を意識したのは高校生の時。教科書に載っていた写真に目を見張った。「海外で水が枯渇してひび割れる地面や進行する砂漠化が、遠い国のことには思えなかった」。数学や理科が好きだったこともあり、理系の視点から環境について学べる大学を探して、関西大学にたどり着いた。



▲卒業研究で指導を受けた林順一教授と

「実験に実験を重ねる日々は大変でした」。理系学生の宿命とも言える実験や実習に追われながらも、藤原さんは充実のキャンパスライフを過ごした。卒業論文は『バイオマス炭化物の水蒸気吸着量と水蒸気吸着速度の評価』。安価で大量に調達できる廃棄物から優れた調質材が発見できれば、食品廃棄物削減にも繋がり、経済的ではないかと考えた。素材は、バナナの皮や穀物のもみ殻など数種類。それらを酸素が少ない状態で加熱処理し熱分解することにより、多孔質の炭化物を作成する。作成した数種類の炭化物について、どれほどの水蒸気が吸着し、どれが優位性を発揮するのかを丹念に調べ上げた。



▲研究室の仲間たちと卒業式で記念撮影

「ひたすら仲間と助け合った4年間でした」と大学生活を振り返る。「同じ学科のみんなとは入学から卒業まで大学にいる時はほぼ一日中一緒でした。だから、課題でも研究でも、分からないことがあれば同じ学科、同じ研究室の友人に質問していました」。逆も然りで、頼り頼られる関係が自身の成長につながった。当時の友人とは今も交流があり、その活躍ぶりに刺激をもらっているという。また、何事も楽しんだもん勝ちという自身の性分が、大学生活をポジティブにしたとも語る。「長時間立ちっぱなしになる実験中でも、友だちと結果に一喜一憂し合ったり、おしゃべりしたり」。そんな人とのつながりを大切にしたい気持ちと、楽しむ姿勢は、社会人になっても大切にしている。「同じ課内はもちろん、他部署とも連携しなければ水環境の保全はできませんし、主体的に取り組むためには楽しまないと!」。

●止まらない探究心と挑戦

入庁から5年が経ち、後進を指導する立場にもなりつつあるが、そこには理系思考が息づく。「仕事の目的をきちんと伝えるようにしています」。任せる計算や分析を断片的にはなく、全体像やゴールを明確にしたうえで指導するのが藤原流だ。「そもそも公式やルールに基づいて物事を探求することが好きなんです。その中で、想定どおりの結果が出ることもあれば、想定外の結果に出会うこともあり、そんな時は探究心が芽生えます。公務員の仕事も法律や条例というルールに沿って進めるせいか、きっと自分の性に合っていると思います」。職場の上司も「藤原さんは何事もまず自分で考えて、実行するという姿勢が素晴らしい。日々成長する姿を見てると、とても心強い存在」と評価する。

「将来は市民の皆さんが楽しめるまちなかリビングのようなコミュニティ施設づくりに関わりたいですね」。人とのつながりと楽しむ気持ちを大切にしている藤原さんの今後の夢は、市民がふれあうことができる憩いの場を設けること。当たり前にも水を守るように、その夢もまた当たり前にならなってしまうのかもしれない。



誰かの「光」になって 写真への恩返しをしたい

見る人に眼前の感動を届けたい

●写真家
高田 晋浩 さん — 経済学部2012年卒業 —



●スペインのサッカー選手が希望の光に

穏やかな語り口と明朗な言葉。今や写真家として活躍する高田晋浩さんのはつらつとした姿からは、生きる意味を見出せなくなった時期があったとは、にわかには信じがたい。

最初の大きな挫折は、関西大学第一高校の入学直後にやってきた。「部活動を選ぶための体験入部で骨折してしまっただけです。今でこそ笑い話にしているが、けがで高校生活に出遅れた多感な少年の心は揺れた。「皆は高校生活を楽しんでいるのに、自分は何しているんだろう」。何ともできない焦りから、絶望さえ感じた。

そんな生活の中で一つの希望の光を見つけた。「療養中はずっとテレビで大好きなサッカーを見ていたんです」。目を奪われたのは特に海外の試合の様。フェルナンド・トーレスというスペインの選手を追いかけた。「決して強くはないチームで、誰よりも気を吐いている。あきらめないし、必ずチームのために一矢報いる」。ひたむきなサッカー選手への共感と、そんな彼を愛するスペインという国への興味が、高田さんを支えた。

●自分を変えるための留学

高校生活を終え、高田さんは関西大学の門をくぐる。「サッカーサークルに入ったりして、充実はしていました」。それでも、自身の生き方への不安や疑問はぬぐえなかった。

希望はまたしてもスペインにあった。「第二外国語で選択したスペイン語の授業が楽しくて」。授業の他にスペイン語教室にも通うほど熱心になった。そして、スペイン留学を決意する。「スペインに行けば、生きるためのヒントが見つかるのではないか」。根拠はなかったが、何かが変わる予感がした。大学近くでの一人暮らしさえ許してくれなかった厳格な両親に相談すると、意外にも快諾してくれた。「息子の本気を感じ取ったのかもしれない」。

留学を実現させたのは、大学3年次生の秋。アルバイトで貯めた資金を握りしめ、1年間のスペイン留学をスタートさせた。語学力を上げるため、最初はあえて日本人の少ないアリカンテという地中海に面した街を選んだ。しかし、「日本で学んではきたも

の、現地で全く言葉が通じない」。現地の人から差別的な扱いを受けることもあり「人格を否定されているようで、つらかったし、悔しかった」。孤独でくじけそうにもなったが、高田さんは自問した。「何のためにスペインにやってきたのか、自分を変えて、生き方を見つけるためだったんじゃないのか」。

すると、スーパーマーケットやバルに行ったら、積極的に現地の人に話しかけた。ものの1カ月。スペイン語の上達とともに、メンタル面の向上を実感した。「僕にとって、生まれて初めてとも言える成功体験でした」。

●写真家の原点となったある一枚の写真

運命の出合いは、そんな修行のさなかに訪れた。いつものように入ったアリカンテのバルに、一枚の写真を見つける。うっそうとした森に滝の流れる風景が、雑然としたタイルに貼り付けられていた。「改めて見ると何てことはない写真なんです、目が釘付けになりました」。こんな写真を撮ってみたい。生き方を見つけた瞬間だった。

帰国し、卒業後は大手都市銀行へ。「入行時からいつかは写真家になるつもりでした。」2年間の銀行勤めで貯めた資金を手に日本全国の自然や建物を撮影しながら、誰にも師事せず、独学で写真を学んだ。やがて東京に拠点を移し、安価でハードな撮影の仕事と引越などのアルバイトで生計を立てる日々。「ギャラリーやカメラ店に飛び込んで、作品を渡していました」。

28歳頃に写真教室を始めた。「自分のちょっとしたアドバイスで受講生の方の写真が格段に良くなるのを見て、自分が人の役に立つんだと実感できました」。教室は現在も続いていて、のべ2,600人以上が高田さんに師事している。同じ頃、自作がコンテストで受賞した。着実に写真家としての実績を積み上げている。

●自分の写真を誰かの希望に

高田さんが写し出すのは、大地、空、海、川、木々、草花などの自然だ。被写体を選ぶ基準は「感動」と語る。「自身の感動したものを撮りたい」。スペインをはじめさまざまな国を訪れ、時に

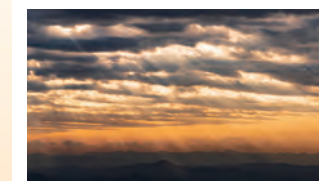


(SIGNS OF SUMMER)

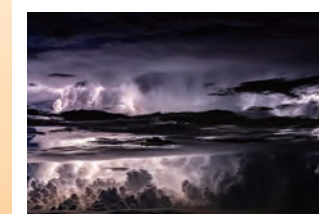
眼前の一瞬に涙しながらシャッターを切る。

そんな自分の感動体験を誰かに届けることができると語る。根底にあるのは、今も財布に入れているバルの一枚とトーレス選手を直接見たという体験だ。「スペイン留学中に、ワールドカップの優勝パレードで彼を見たんです」。憧れの人と目が合った瞬間、考えた。「トーレスは僕を知らない。でも僕は彼を知っていて、希望や感動をもらっている」。高田さんは希望、感動を「光」と表現する。「自分の写真が誰かの光になることを願っています。それが僕を導いてくれた写真への恩返しであり、僕の生きる意味だと考えています」。

写真家として10年の節目を迎えようとしている今、高田さんは一つの決断をした。「新たな挑戦のために、ずっと続けているスペインでの撮影に区切りをつける」。今、高田さんは自分を支え、導いてくれたスペインの風景を一冊の写真集にまとめるべく奔走している。「いつか自分の子どもに自慢できるような写真集にしたいですね」と、はにかむ表情は、生き方に迷いのない穏やかな人間のそれだった。



(PERFORMANCE OF LIGHT)



(DRAGONS NEST)

自分には何も誇れるものがないんじゃないか。高校入学直後のけがで入院していたある日、高田晋浩さんはぼうぜんとしていた。高校生にして「誇れるものがなく、生きている意味が見出せなくなったんです」。大学入学後も、そんな鬱々とした気分はまとわりついてた。しかし、留学先のスペインである一枚の風景写真と運命的な出会いを果たす。それは一人の人間の今後を決定づける出来事だった。



学生時代の高田さん。(左) 関西大学サッカーサークルの仲間たちと (中) スペイン留学時代 (右) 留学中にスペインがサッカーW杯で優勝を果たし、地元の人たちと共に祝った

高田 晋浩 — たかだ すずひろ
■1988年大阪府生まれ。関西大学第一中学校・第一高等学校卒業。2012年関西大学経済学部卒業。3年次生のときに留学したスペインで、一枚の風景写真と出会い写真家になることを決意。大学卒業後、大手都市銀行に入行。現在、写真家として独立し、国内外で積極的に撮影に取り組みが写真教室を開講する。2020年から3年連続で国際写真賞(International Photography Awards)を受賞。



代表作の一つ「RECITAL」と高田さん

LEADERS NOW!

好奇心を原動力に、「冒険」の扉を開く

大自然をフィールドに、芽生える特殊な絆



1958年、日本の大学で2番目に創部し、「活動範囲は地球全体！」をスローガンにジャンル問わずさまざまなアウトドア活動を行う「探検部」。目新しい企画力、発想力で未知の地へ赴き、誰もしたことがないような体験を重ねる中で自身の無限の可能性も導き出していき、その活動の実態に迫る。



鉱物採取で集めた石を並べて。(左から)村上さん、田中さん、岸さん、外川さん、竹島さん

●文化会探検部

法学部3年次生 主将

竹島 翼さん (滋賀県 東大津高等学校卒業)

社会学部4年次生

岸 和沙さん (大阪府 大阪国際大和田高等学校卒業)

社会学部3年次生

村上 真渚さん (兵庫県 西脇高等学校卒業)

文学部2年次生

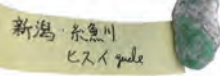
田中 悠介さん (京都府 東山高等学校卒業)

社会安全学部2年次生

外川 丈太郎さん (兵庫県 太子高等学校卒業)



▼糸魚川で発見した珍しい翡翠



●無限の好奇心に基づく個々の活動を尊重

探検部と聞いて、具体的な活動内容を思い浮かべることができる人は多くないだろう。それだけ「探検」という言葉には、ワクワクするような魅力が詰まっている。「一般的なアウトドア活動サークルとは少し違いますね。地理的な「探検」だけではなく、新しい形の「探検」を模索しながら活動しています」と話してくれたのは、主将の竹島さん。

メインの活動だけでも、南アルプスや大峰山の登山、四万十川や仁淀川での川下り、最近頻繁に行っているという鉱物採集、網走や知床での海岸線踏査、無人島での合宿まで、活動の範囲は驚くほど多岐にわたる。

「他部だと1年間の活動内容は決まっていることが多いですが、それがないのが探検部の最大のメリット。やりたいことをやりたい時に、何でもできるのが魅力です」(竹島さん)

基本的には「やりたいこと」を企画した部員を中心に、賛同メンバーを募って活動を行うのが探検部のスタイル。賛同メンバーがいなければ単独で活動する場合もあり、竹島さんは網走湖横断、田中さんは雪氷藻類の研究に一人で出かけたこともあったそうだ。

●鍛えるのは体力、そして精神力。自分の成長を日々感じる

自由に楽しい活動ばかりしているように一見思えるが、もちろん装備の準備など安全管理・対策は万全に整えており、目標とする活動に向けた体力づくりのトレーニングも欠かさない。毎週部会後のランニングや、重い荷物を背負って学内の階段をひたすら往復する「歩荷」は探検部伝統のトレーニング。



探検部の倉庫



▲比良山地の堂満岳(滋賀県)



▲探検部所有の山小屋「銀嶺荘」(京都府北山)



▼瀬戸内海の無人島・加島(広島県)



▼富士山9合目



▲奄美群島の江仁屋離島(鹿児島県)

「重い荷物を背負うのは、どんな活動にも必要な力。例えば、活動中に負傷した仲間を背負って運ばなければいけない事態になった時、置き去りにするわけにはいきません。楽しさばかりでなく、有事が起こった時のために必要な体力づくりは怠らないようにしています」(竹島さん)

トレーニングや活動を通して体力が付いたのはもちろん、「自分には六甲縦走をやり遂げた経験があるから」、「17時間登山した大変さを思えば、このくらいは平気」と、探検部での経験が日常生活の困難や苦勞を乗り越えられる精神力の強さにつながっているという。

さらに主将の竹島さんは「常に通常とは違う角度から捉えた新鮮な活動を考えるようにしているので、企画力も身に付いたと思います。目新しい発想力や、いろいろな視点で物事をとらえられるようになりました」と自身の成長も感じている。

●自然をフィールドにするからこそ護るべきもの

山や海、川など大自然を舞台にした活動が多い探検部。切り離すことのできない環境の保全や自然との共生については、活動をする中で考えることも多々あるようだ。

「無人島はペットボトルや壊れた釣り具といった漂着物がとても多いんです。合宿で活用できるものはしますが、本来あってはならないものですね」(外川さん)。「道路が走る低山も不法投棄が多いですね。小さいものなら回収していますが、テレビや家具のようなものまで捨てられています」(田中さん)。「普段の文化的・衛生的な生活で当たり前になっていたことが、自然の中ではできなくなります。環境への影響を考え、自然に優しい洗剤を使うなど工夫しています」(岸さん)。「合宿ではマイ箸、マイ皿持参でゴミを出さないようにするのはもちろん、SDGsに準拠した循環型水洗のパ

イオマストイレなども利用します」(村上さん)。「排泄物と違ってトイレトペーパーは分解されづらいので燃やして捨てるなど、自然の中での礼儀や作法は必ず守るようにしていますね」(竹島さん) 人間が足を踏み入れるだけで自然の形は多少なりとも変わってしまう。その自然の中で学ばせてもらっているからこそ、探検部は環境への負荷を意識しながら日々活動を行っている。

●非日常の中で幾多の困難を乗り越えてきた 強固なつながり

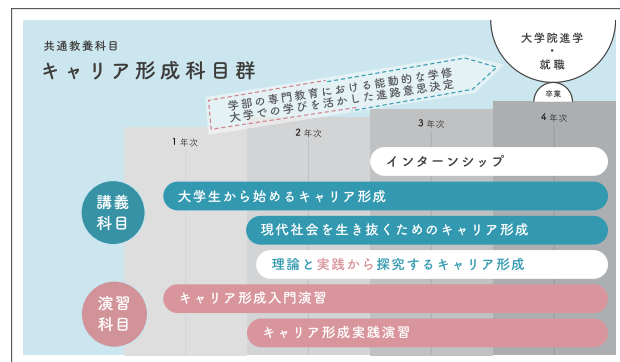
最後に今後の活動目標を尋ねると「北極に行きたい」(竹島さん)。「スリランカ密林遺跡調査隊に参加したい」(外川さん)。「アラスカルートで北極に行って生態調査がしたい」(田中さん)と、目を輝かせる現役部員たちの隣で、既に活動を引退した岸さんは「自然と人間の日常生活が断絶されていると感じるので、探検部での経験を生かして、自然を感じられる生活の営みを今後もしたいですね。探検部では友達とも少し違う、特別な人間関係も築くことができました」と自身の活動を振り返ってくれた。

徐々に余裕がなくなっていく過酷な自然環境の中、部員同士でいざこざが起こることもあった。しかし、それを乗り越えた分、強い信頼関係が芽生え、同じ達成感を味わうという貴重な体験を重ねてきたという。「他のことでは得難い「仲間」としての関係は、探検部でないと作れなかったと思います」の言葉に、探検部の魅力すべてが詰まっている。



◎全学共通の「キャリア形成科目群」を新設

自律的なキャリア形成能力を低年次から育成する



関西大学は、2023年度から全学共通教養科目に「キャリア形成科目群」を新設した。VUCA時代、低年次から自律的なキャリア形成能力を育成するため、より体系化したカリキュラム構成へと一新した。

新しい「キャリア形成科目群」は、①「大学生から始めるキャリア形成」「現代社会を生き抜くためのキャリア形成」、②「キャリア形成入門演習」「キャリア形成実践演習」、③「理論と実践から探究するキャリア形成」の科目で構成され、全学が受講可能。アク



ティブラーニングを取り入れた学部横断型交流の授業設計により、学生一人一人に合わせたリーダーシップの技能や態度を養いつつ、多様な他者と協働しながら自律的に考動できる人材を育成する。

さらに、同年から「産学連携型ジョブシャドウイングプログラム」を始動。学生が社会人の仕事に同行し、その姿を観察する「ジョブシャドウイング(仕事観察)」を映像化し、Webツール「ハタチのトビラ」で配信している。キャリアの意識を育み、多様な業種・職種を理解を深められるよう、今後もコンテンツの充実を図る。

◎2023年度入学式を挙行。新入生歓迎行事・歓迎の集いも開催

桜が咲き誇るキャンパスに、新入生の笑顔あふれる



「新入生歓迎の集い2023」のサプライズゲスト、サンブラザ中野くん(中央)とパッパラー河合さん(右)▼



2023年度関西大学入学式を4月1日、同大学院入学式を3日、千里山キャンパスにて挙行し、6,705人の学部生と855人の大学院生が新たなスタートを切った。

また、2日には、今春から一人暮らしを始める新入生を対象に、

学生同士の交流を促す「関西大学新入生歓迎の集い2023」を開催した。本イベントは、初めて一人暮らしをする在学生の父母から不安の声が寄せられたことを受け、大学と教育後援会・校友会・関大生協などが協力し、2018年度から行っている。当日は、ファシリテーターとして職員も参加し、約800人の新入生同士のスムーズな交流をサポート。応援団の演舞演奏やサプライズゲストとしてサンブラザ中野くんとパッパラー河合さんの登場。最後は全員へ新生活に役立つプレゼントもあり、盛会のうちに終わった。

さらに、3・4日には、オリエンテーション実行委員会運営のもと、各クラブ・サークルがブースを出し、熱心に新入生を勧誘した。悠久の庭と図書館前では、さまざまな団体がパフォーマンスを披露し、活動内容をアピールするとともに歓迎ムードを盛り上げ、キャンパスは活気で満ちあふれた。



◎商学部・鉛野仁子ゼミによる産学連携企画

“ながら”足裏ケアスリッパ『Uruvi』を開発



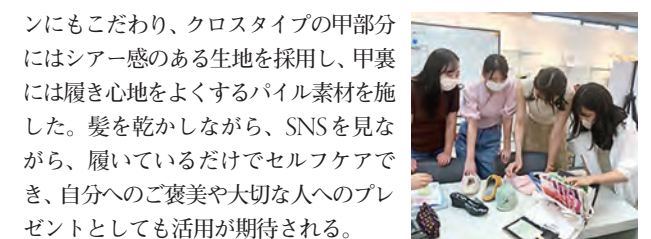
▲足裏ケアスリッパ『Uruvi』

商学部の鉛野仁子ゼミが、株式会社オクムラとの産学連携により、忙しい日々の“ながら”足裏ケアをテーマにしたスリッパ『Uruvi』を開発し、4月12日よりオンラインショップ(株式会社オクムラショッピングサイト)にて販売を開始した。

鉛野ゼミとオクムラは、2019年度から連携し、若年層にその魅力を広く知ってもらうためのプロジェクトに取り組んできた。

2020年度に開発した「冷える足を寝るまで『POKATTO』スリッパ」は、好評につきレギュラー化された。第2弾となる『Uruvi』は、10～30代の美容に興味のある女性をメインターゲットとし、現代のライフスタイルや趣向に合った商品開発を心掛けた。

その狙いは、スリッパの認識を「履物」から「美容グッズ」に変化させること。後回しにしがちな足の保湿に着目し、スリッパの生地には保湿素材「オアシスロード」を使用した。また、デザイ



ンにもこだわり、クロスタイプの甲部分にはシアー感のある生地を採用し、甲裏には履き心地をよくするパイル素材を施した。髪を乾かしながら、SNSを見ながら、履いているだけでセルフケアでき、自分へのご褒美や大切な人へのプレゼントとしても活用が期待される。

◎関西大学・法政大学・明治大学トップ対談シンポジウムを開催

ポストコロナの高等教育を見直す



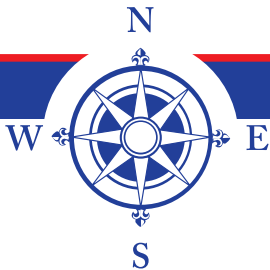
関西大学、法政大学、明治大学は、連携シンポジウム「ポストコロナの高等教育を見直す一助へ〜3大学の学長と総長が徹底的に語る!」を3月4日、千里山キャンパスにて開催した。3大学は2017年に大学間連携協定を締結以降、教育・研究活動のほか、産学連携、地域社会への貢献、学生交流など、多彩な連携活動に取り組んできた。



法政大学 廣瀬 克哉 総長 明治大学 大六野 耕作 学長 関西大学 前田 裕 学長

第1部では、法政大学の廣瀬克哉総長が「ポストコロナに向けての『実践知教育』の展開」、明治大学の六六野耕作学長が「自ら未来をデザインし、地図を描く力を涵養する明治大学の取り組み」、本学の前田裕学長が「ポストコロナの『学の実化』と『総合知』」をテーマに講演し、各大学の特長的な取り組みを踏まえながら、目指すべき姿と現状の課題などを示した。

続く第2部では、前田学長がモデレーターを務め、3大学トップによるディスカッションを進行。各自の考えを述べながら、次世代の教育において大学が果たすべき役割や、連携の可能性について議論を深めた。



第31回「関西大学体育振興大島鎌吉スポーツ文化賞」授与式を挙行



3月3日、第31回「関西大学体育振興大島鎌吉スポーツ文化賞」授与式を千里山キャンパスで執り行った。

本学学生の部では、2022年9月の日本インカレ10,000mで日本人トップの成績を取った亀田仁一路さん(社会安全学部3年次生・当時)や、ハンドボール「第17回男子ジュニアアジア選手権」男子U21代表選手として優勝した羽瀧晴一郎さん(総合情報学部2年次生・当時)ら計10人が受賞。団体では、「第61回全日本学生なぎなた選手権大会」公開競技男子団体の部で優勝したなぎなた部が受賞した。また、一般の部では、本学卒業生で大阪桐蔭高等学校 硬式野球部監督の西谷浩一氏に同賞が授与された。

留学生別科設立10周年記念シンポジウムを開催



3月11日、本学南千里国際プラザで、「日本語教育のこの先を見つめるー留学とは何か、留学生別科の役割とはー」をテーマとする留学生別科設立10周年記念シンポジウムを開催した。

当日は、文化庁国語課日本語教育調査官・松井孝浩氏による「文化庁における日本語教育施策について」をテーマとした基調講演やパネルディスカッション等を実施。ハイフレックス形式により対面で50人、オンラインは海外からの接続も含め50人以上の教育機関関係者や修了生が参加した。

「EXPO大学関大キャンパス」を開催



4月23日、「EXPO大学関大キャンパス」を梅田キャンパスで開催した。本イベントは、2025年開催「大阪・関西万博」に向け、大阪で生まれ育った大学としての関わり方を考え、学園全体の機運を醸成することが目的。

当日は、有志団体「一般社団法人demoexpo」のメンバーが、「万博ってなに?」「私たちに何ができる?」をテーマにスピーチ。万博に関わる本学卒業生5人の活動紹介もあり、参加した60人の学生は熱心に耳を傾け、交流を深めていた。

各学舎のトイレで生理用品の無償配布を開始



▲専用ディスペンサー

「関西大学ダイバーシティ推進宣言」のもと、学生発のアイデアにより、構内女子トイレにおいて生理用品の無償配布を開始した。

各学舎等の一階の女子トイレに生理用品専用ディスペンサーが設置され、非接触型ダストボックスを設置するなど、女子トイレの整備も進められている。なお、無償配布の生理用品は、SDGsの観点から更新対象の災害用備蓄品を活用している。

2024年度一般選抜の試験地に「滋賀」「米子」「沖縄」を設置



「Kan-Dai web」入学試験情報総合サイト

関西大学では、2024年度一般選抜(一般入試・共通テスト利用入試(併用))で、「滋賀試験地」、「米子試験地」、「沖縄試験地」を新たに設置する。これにより、2024年2月1～4日は全国14都市、2月5～7日は全国29都市で、札幌から沖縄まで全国各地での受験が可能となった。

大阪府吹田市山田南の土地および建物を購入

学校法人関西大学は、武田薬品工業株式会社が研修施設として所有する大阪府吹田市山田南の土地(実測面積約75,000㎡)および建物(延床面積約27,000㎡)について、2023年3月31日付で売買契約を締結した。今後、具体的な計画が確定次第、発表予定。

